

伊藤 元重

『はじめての経済学 [上][下]』

- 日本経済新聞社 (2004年)
- 価格872円 (税込)

中野正裕 経済学とはどのような学問分野なのか、経済学では各種の社会問題をどのように考察するかを平易に解説した入門書です。本書では経済データや具体的な制度の例を豊富に扱っており、現実経済のイメージをつかむのに役立ちます。上巻ではマクロ・ミクロ分野の基本的な考え方、下巻は財政、金融、企業、労働、国際経済などの専門領域について、幅広く解説しています。経済学をもっと学習したいという動機付けを促す一冊だといえます。

岡田知之 上巻と下巻に分かれており、上巻は、マクロ経済学、ミクロ経済学、ゲーム理論といった基礎分野を重視した内容となっており、下巻では、公共経済学、金融、組織の経済学、国際経済学といった応用分野を重視した内容となっている。この本の特徴は、できるだけ直感的に経済学の考え方を身につけることが出来るように配慮されている点にある。技術的な説明は最低限にとどめ、具体例を挙げながら経済学の考え方が丁寧に説明されているため、初学者にも読みやすい構成の本である。

山森哲雄 日本経済に関する豊富な事例をもとに経済学の基本的な考え方について解説しています。あくまで「考え方」を学ぶという趣旨で書かれていますので、経済理論を学習するには適していませんが、経済理論と現実経済との関連について知るには大変いい本だと思います。経済学をこれから学ぶ学生にはぜひ一読してほしい一冊です。ミクロ・マクロ経済学、ゲーム理論、公共経済学、財政学、国際経済学といった経済学の主要な分野はすべて取り上げられていますので、どの分野を中心に学習を進めていくかを考えるうえで参考になると思います。



大竹 文雄

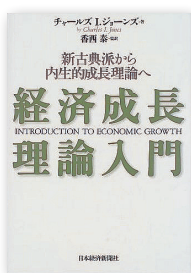
『競争と公平感 -市場経済の本物のメリット-』

- 中央公論新社 (2010年)
- 価格819円 (税込)

中野正裕 市場競争は、人々に経済的豊かさを得ようと努力するインセンティブ(誘因)を与える一方、人々の間に、生産性に応じた賃金など雇用条件の格差を生み出します。したがって、人々が望む公平性を担保するため、市場経済をどのような制度で補完すべきかが問題となります。本書は大学の講義で指定されるような、特定の経済分野を体系的に扱う教科書ではありませんが、市場競争と経済格差に関係するさまざまな話題に言及し、経済学の立場から分かりやすく解説した良書だといえます。

具体的に、わが国の労働環境や雇用政策の変化が経済格差に及ぼした影響、市場競争と経済格差の関係、男女間の賃金格差や昇進格差の動向、日本の小中学校における経済学教育の現状、教育や脳の仕組みと経済格差の関係、個人の幼少期の生育環境が成人後の消費や借入れ態度に及ぼす影響、文化や宗教と経済の関係といった幅広い分野の事例や研究成果が紹介されます。伝統的な経済学の考え方だけでなく、最新の応用分野に関する調査研究や、近年注目されてきた行動経済学のアプローチにも言及しています。

専門的に高度な内容にも触れていますが、初学者や一般の読者にも分かるよう平易な解説がなされ、格差をめぐる基礎情報の収集や論点整理に役立つと思います。なお、著者の専門は労働経済学で、詳細なデータに基づいて格差問題を丁寧に検証した『日本の不平等』(日本経済新聞社、2005年)を著したことで知られており、格差問題をより本格的に研究したい学生には、こちらもぜひ一読することを薦めます。



チャールズ・I. ジョーンズ
『経済成長理論入門』

- 日本経済新聞社 (1999年)
- 価格2,520円 (税込)

岡田知之

経済成長をもたらす原動力は、何であろうか。この問いに答えようとするものが内生的経済理論であり、この本では、内生的経済成長理論の考え方をふまえて、経済成長に関する現状と理論の説明が行われている。

通常、内生的経済成長理論を学ぶ為には、最適制御理論などの動的最適化 (現在から将来にわたり、最適な選択をすること) に関する知識が必要となる。この本では、そのような前提知識なしに、新技術や人的資本の蓄積が重要な役割を果たす内生的経済成長理論の考え方を身につけることができるように、工夫されている。もちろん、数式が全然出てこないわけではないし、数学が苦手な人にとっては、難解な部分も多いかもしれない。しかし、この本で使われている数学は、十分に努力すれば学部生でも理解できる可能性が高いレベルであると思われる。巻末の付録として数学の復習がついているので、数式がよく分からないときには、この付録が役にたつかも知れない。

また、単に理論の説明だけではなく、この本では、さまざまな国のデータに基づいた図を効果的に用いることにより、現状の説明が分かりやすく行われている。図で、現状を理解した上で、現状を説明する理論を (過度に技術的にならないように単純化して) 紹介するというかたちで本文が進められており、理解しやすい構成となっている。

内生的成長理論に関する説明は複雑になるケースが多いが、この本は十分な工夫を施すことにより比較的単純な形で説明が行われている。「経済成長の原動力」に興味のある方は、一度、手に取ってみる価値があるように思う。



梶井 厚志/松井 彰彦
『マイクロ経済学
戦略的アプローチ』

- 日本評論社 (2000年)
- 価格2,415円 (税込)

山森哲雄

マイクロ経済学をゲーム理論の体系から捉えた斬新なスタイルの教科書です。本書では分析対象となる経済現象を複数の経済主体の間で発生する戦略的な関係、「ゲーム」として捉えることを基本としており、マイクロ経済学で扱うほとんどのトピックをゲーム理論の基本的な概念と分析手法によって解説しています。標準的な教科書との顕著な違いは何と言っても競争市場の取り上げ方でしょう。標準的なマイクロ経済学の教科書では伝統的な市場理論を使って競争市場を分析します。一方、本書では、売り手と買い手の1対1の相対取引を「ゲーム」として表現することから競争市場の考察が始まります。2人の間に仲買人がいる場合などいくつかの取引形態を考察したのち、売り手と買い手が多人数いる場合へと発展します。そして、伝統的な市場理論が予測する取引価格や取引数量は、そのような「ゲーム」の結果として成立することが示されるのです。つまり、市場理論をゲーム理論によって再構築していると言ってもいいでしょう。ゲーム理論が戦略的な相互依存関係を分析する包括的な理論体系であることを考えれば、ゲーム理論を中心とした本書のようなスタイルの方がマイクロ経済学の教科書としてはむしろ自然なのかもしれません。

ある町のパン屋を取り巻く人々の (少しコミカルな) 物語からすべての章がはじまっているのも本書の特徴です。この物語を読むだけでもマイクロ経済学が対象とするさまざまな問題を身近なものとして感じることができると思っています。数式は多く用いられていますが、経済学部1年生にも十分に理解できる内容です。初めてマイクロ経済学に触れるという学生にはもちろん、マイクロ経済学を一通り学習した学生にもお勧めの一冊です。

総 評



左から 中野正裕准教授／岡田知之准教授／山森哲雄講師

中野 正裕 この特集では、経済学の入門科目・基礎科目の講義で毎年指定されるスタンダードな理論書に比べて読みやすく、また、個々の経済問題やゲーム理論、経済成長論、労働経済学など応用分野への関心を高めてくれるいくつかの入門書を選定しています。たった1冊のテキストに頼ることが全ての学生諸君にとって賢明だとは思いません。数多くの出会いの中から、自分にfitしたテキストを見つけてほしいと思います。重要なことは、(i)幅広く様々なテキストを見渡し、自分の読みやすいと感じるものを選ぶこと、(ii)テキストにおける個々の章や節の目的、著者の意図を理解するよう心がけること、そして(iii)難解な箇所当たったら、他のテキストや文献ではどう説明されているか調べてみることで、です。(iii)については、教員だけでなく友人や先輩の助言が有益なこともあります。文献学習を通じて学ぶ楽しみを増やしてもらいたいと思います。

岡田 知之 人と人の間に相性があるのと同じように、人と本(文章)の間にも相性があるように思う。ある文章が自分にとって自然に感じられるものであっても、同じ文章を他の人が不自然なものと感じるケースがあるということは否定できない。また、説明方法の好みも人によって異なる場合がある。厳密で客観的な説明を好む人もいれば、(多少厳密さを犠牲にしても)直感的な説明を好む人もいる。人の好みは多様である為、すべてに人にとって(ベターなテキストは存在するかもしれないが)ベストなテキストは存在しないのではないかと思う。一昔前とくらべ、近年では個性的な入門書の出版が増えているように思う。これは、自分にあったテキストを選びやすい環境が整いつつあることを示しているのではないだろうか。どのようなテキストを用いたとしても、学習を進める際には努力が必要となる。しかし、自分にあったテキストを見つけることができれば、よりスムーズに学習を進めることができるであろう。自分の目で、自分にあったテキストを見つけ出してほしい。

山森 哲雄 論理的な厳密さや分析の精確さを犠牲にしながらかかり易さや読み易さを追求した「お手軽」なテキストが近年ますます増えてきたように思います。「お手軽」なテキストは、数学を使わずに経済学の基本的な考え方を誰にでも分かるように紹介してくれます。経済学で使う数学が分からずに経済学そのものへの興味を失ってしまう学生は多くいますから、このようなテキストが初学者の経済学離れを防ぐのに一役買っていることは間違いありません。しかし、これは経済学という学問を単なる情報として紹介しているに過ぎません。このような情報は知識にはなりえないことを学生は理解すべきです。せっかく経済学部に入学したのですから、「お手軽」なテキストで経済学の面白さが分かったら、少しずつ難しい専門書にチャレンジするようにしてください。他の参考書を調べたり自分で計算をしたりして数時間かけてようやく1ページの内容を理解することができる。ぜひそんな経験をしていただきたいと思います。このような訓練を地道に重ねることで、はじめて経済学を生きた知識として身につけることができるのです。